

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13144

研究課題名(和文) 地域生活に根ざしたスポーツツーリズム論の構築をめざす社会学的基礎研究

研究課題名(英文) Sociological basic research for the building of community-based sport tourism

研究代表者

村田 周祐 (MURATA, Shusuke)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：00634221

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、持続的スポーツツーリズムという「外来の文化形態」が「在地化」していくメカニズムを明らかにした。多くの移住サーファーが漁師になっている千葉県鴨川市大浦集落におけるフィールドワークから明らかとなったことは、「漁業者」であるスポーツ移住者を、地域の担い手である大浦の「漁師」に仕立てあげていく社会的しくみであった。その主な成果として、村田(2020)「暮らしのなかで創造される漁師—千葉県鴨川市定置網漁の現場から」『アートがひらく地域のこれから：クリエイティビティを生かす社会へ』を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

どんなに新しく正しい理念や技術であっても「地域の個性」に応じて「組み直す」必要がある。本研究の社会的意義は「地域の個性」に迫るためのひとつの手法を提示した点である。本研究の学術的意義は、日本のスポーツ社会学の学術的な状況において数少ない、スポーツからグローバル化する現代社会を浮き彫りにしていく実証研究である点にある。そのうえで、スポーツを切り口に、グローバル経済の最前線に位置づく「地域の個性」を浮き彫りにしていく「方法としてのスポーツ」を提示した点で本研究は斬新的であるといえよう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify how sustainable sports tourism is indigenous. Fieldwork was conducted in Oura, Kamogawa City, Chiba Prefecture. The reason is the fact that many migrant surfers are fishermen. What became clear from fieldwork was the mechanism by which the sports tourism population became a local resident. This study demonstrated a social mechanism for turning "fishermen" migrants into "Ryoushi". The result was published. Murata (2020) "Fishermen created in daily life-From the site of set net fishing in Kamogawa City, Chiba Prefecture" "The future of the area where art opens: Toward a society that makes the most of creativity"

研究分野：スポーツ社会学 村落社会学

キーワード：スポーツツーリズム 方法としてのスポーツ 持続可能な開発 在地化

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、次のような現実的および学史的な問題意識にある。

【問題としての持続的スポーツツーリズム】

バブル期以降、観光立国推進基本法(2006年12月成立)やエコツーリズム推進法(2008年4月施行)を背景に、スポーツツーリズムは大規模な空間変化を避けることで地域社会や自然環境の持続性を担保する形態へと移行している。本研究では、こうした形態を「持続的スポーツツーリズム」と呼ぶ。(1)中央・地方行政の財政問題、(2)環境保全意識の隆盛、(3)地域経済の疲弊という課題に直面する現代の農山漁村において、地域空間を「そのまま」観光資源に転換させる持続的スポーツツーリズムは、時代の要請として立ち現れている。

ところが、日本のスポーツ社会学は、現在でもバブル期のリゾートスポーツ開発の遺産や社会経済的な便益・不利益の議論に終始し続けている。なぜなら、「持続的開発」というパラダイム転換とそれを背景にするバブル期以後のスポーツツーリズムを批判的に捉える社会学的方法を持っていないからである。だからこそ、社会的要請の高まる持続的スポーツツーリズムが地域的に展開している実態に迫るための実証研究が必要である。

【現場のリアリティに迫る研究視角：「在地化」】

時代の要請としてある持続的スポーツツーリズムであるが、現場の実態を詳細に把握した議論は進められていない。というのも、持続的スポーツツーリズムは「よいもの」という想定のもとに現場の実態が切り取られ、語られてきたためである。なぜなら、現代において「持続的発展」や「持続的開発」といった理念は疑う必要のない「正しさ」を持った通念として理解されているからである。具体的な表現をすれば、「何も建設しないし、何も壊さない、だから問題はない」と考えられているのである。1990年代からの欧米を中心に発達してきたスポーツツーリズム研究ではあるが、「持続性」をめぐる理念は盲目的に自明視されてきた。そのため、持続的スポーツツーリズムの実態に迫る研究視角を、既存のスポーツツーリズム研究は持ち得ないままである。

村田周祐(2017)『持続的スポーツツーリズムと空間紛争』新曜社で採用した「紛争」という研究視角から明らかとなったのは、持続的スポーツツーリズムをめぐる「軋轢」が生じるメカニズムと同時に、「軋轢」を抱えつつも「共在」していく人々の日常的な生活実践の存在であった。そこで後編となる本研究では、持続的スポーツツーリズムの地域的展開の実態に照準する「在地化」という研究視角から、「共在」の実態とそれを支える人々の論理に迫った。ここでいう「在地化」とは、既存のスポーツツーリズム研究にみられる予定調和的な「統合論」ではなく、「共在」を先に見据えた「折衝論」から現場の実態を捉え直していく研究視角である。この「在地化」という研究視角は、現場の生活実態から、持続的スポーツツーリズムとそれを支える理念を包括的に捉え直す点で独創的である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、住み込み型フィールドワークから、持続的スポーツツーリズムが地域生活と共在関係を築くありようを描出することである。ここでいう持続的スポーツツーリズムとは、ゴルフ場やマリナーを新設することなく、地域空間を「そのまま」利用することで自然環境や地域

生活を保全しつつ地域発展を志そうとする現代的なスポーツツーリズムを指す。しかし実際には、地域生活や生業の場である地域空間をスポーツ利用することは、「ここは何のための地域空間なのか」という新たな問題を現場に引き起こしている。

村田周祐(2017)『持続的スポーツツーリズムと空間紛争』新曜社では、「紛争」という視点から、持続的スポーツツーリズムをめぐる「軋轢」のメカニズムに迫った。だがそこでは同時に、「軋轢」を抱えつつも「共存」していく人々の日常的な生活実践の存在も浮かび上がってきた。後編となる本研究では「在地化」という視点から、人々の「共存」の論理に迫ることで、地域生活に根ざしたスポーツツーリズム論の構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究は、千葉県鴨川市大浦地区を調査地に、持続的スポーツツーリズムをめぐる軋轢を抱えつつも共存していく人々の微細で日常的な生活実践とその論理に迫っていくために、徹底した住み込み型フィールドワークとモノグラフを採用した。

その狙いは、「非日常」の中で実施される一般的なインタビュー調査とは異なり、調査対象となるインフォーマントの「日常」の中に調査者の身体を投入させ、様々な経験を彼らと共有する中で変容していく申請者自身の身体を糧に、彼らの論理や道理に迫ることにある。そし、そこから研究者や外部が自明とする「通念」を捉え直していくためでもある。

具体的な調査項目は以下の3点である。

- ・ 移住サーファーが多く従事する鴨川市漁業組合定置部における参与観察、聞き取り調査、資料収集
- ・ 移住サーファーが多く居住する鴨川市大浦地区における参与観察、聞き取り調査、資料収集
- ・ 移住サーファーの生活史と鴨川サーフィンの組織的展開をめぐる聞き取り調査、資料収集

4. 研究成果

グローバリゼーションが浸透した現代において、日本の農山漁村の社会的役割は食の「生産空間」からスポーツや観光のための「消費空間」に移行している。本研究は、こうした社会背景を念頭に、持続的スポーツツーリズムによって消費空間化していくなかで、それでも地域空間を生産空間とし続ける人々の英知に迫るものである。

以上の問題意識から、本研究は持続的スポーツツーリズムという「外来の文化形態」がどのように「在地化」してくのかという問いを明らかにすることを目的とした。その問いを明らかにするために、多くの移住サーファーが漁師になっている千葉県鴨川市大浦集落において徹底した住み込み型フィールドワークを実施した。フィールドワークから明らかとなったことは、スポーツツーリズムによって移動した人口が地域の担い手になっていくメカニズムであった。「漁業者」である移住者を、地域の担い手である大浦の「漁師」に仕立てあげていく社会的しくみの存在が明らかとなった。その主な成果として、村田(2020)「暮らしのなかで創造される漁師—千葉県鴨川市定置網漁の現場から」『アートがひらく地域のこれから:クリエイティビティを生かす社会へ』を出版した。

本研究は、現代漁業村落の地域生活という極めて不定形な事象をスポーツツーリズムから描き出す学術的営為でもあった。つまり、スポーツを切り口に、グローバル経済の最前線に位置づく「地域の個性」を浮き彫りにしていく「方法としてのスポーツ」を提示した点で、斬新的な研究であったといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---------------------------------------|-------------------------|
| 1. 著者名 村田周祐 | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 おばあさんの灰皿 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 フィールドで出会う風と人と土 | 6. 最初と最後の頁 120 - 124 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 細谷昂, 中川恵, 本多俊貴, 岡田航, 村田周祐 | 4. 巻 24-1 |
| 2. 論文標題 農村モノグラフの意義と課題（質疑応答） 庄内モノグラフとの対話から | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 村研ジャーナル | 6. 最初と最後の頁 37-46 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.9747/jars.24.1_37 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 村田周祐 |
| 2. 発表標題 変わらないために変わり続けるムラ 竹内利美の動的平衡論から迫る移動の時代における宮城県七ヶ宿町湯原と千葉県鴨川市大浦の生活 |
| 3. 学会等名 第 69 回（2021 年度）日本村落研究学会大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 村田周祐 |
| 2. 発表標題 方法としてのスポーツ |
| 3. 学会等名 日本スポーツ社会学会 第31回 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 村田周祐 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 東北大学出版会 | 5. 総ページ数 360 |
| 3. 書名 「方法としてのスポーツ」松村 和則、前田 和司、石岡 丈昇編『白いスタジアムと「生活の論理」』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 村田周祐 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 292 |
| 3. 書名 「暮らしのなかで創造される漁師—千葉県鴨川市定置網漁の現場から」野田邦弘、小泉元宏、竹内潔、家中茂編『アートがひらく地域のこれから』 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 村田周祐 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 ミネルヴァ書房 | 5. 総ページ数 304 |
| 3. 書名 「住民組織と地域生活」「暮らしのなかの生活保障」「農山漁村の新たな担い手」「スポーツと地域づくり」家中茂、藤井正、小野達也、山下博樹編『新版 地域政策入門』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 村田 周祐 | 4. 発行年 2017年 |
| 2. 出版社 新曜社 | 5. 総ページ数 244 |
| 3. 書名 空間紛争としての持続的スポーツツーリズム - 持続的開発が語らない地域の生活誌 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|